フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問	野村 萬	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師
	福原義春	株式会社資生堂 名誉会長
名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	荻田 伍	アサヒグループホールディングス株式会社 相談役
副委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
	栗原 章	豊島区文化商工部長
	東澤 昭	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員	岡田恭子	株式会社資生堂企業文化部長
	尾﨑元規	公益社団法人企業メセナ協議会 理事長、花王株式会社 顧問
	熊倉純子	東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授
	小沼克年	アサヒビール株式会社社会環境部 部長
	鈴木正美	東京商工会議所豊島支部 会長
	扇田昭彦	演劇評論家
	永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長
	小澤弘一	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	岸 正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	小島寛大	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事	鈴木さよ子	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)	

ディレクターズコミッティ

代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	植松侑子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横堀応彦

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

事務局チーフ	葦原円花
制作	小島寛大、植松侑子、河合千佳、喜友名織江、高橋マミ、十万亜紀子、松嶋瑠奈、荒川真由子、横堀応彦、小山ひとみ、砂川史織、松宮俊文、守山真利恵、横井貴子
広報	堀江紗恵、湯川裕子
企画営業	長原理江
票券	渡邊絵里、宍戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸来
経理	堤 久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子
技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネート	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネート	相川 晶(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション＆デザイン	河村康輔
メインビジュアル	二階調サトシ(SHOHEI×河村康輔)
ウェブサイト	濱田真一＋重松 佑＋菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンドリューズ・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング　李 丞孝
シュリンゲンジーフ特集 企画・コーディネート　ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、
NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金(国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ vol.2)
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、
J-WAVE 81.3FM
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、
チャコット株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、
一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、
特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京　フェスティバル助成
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

平成26年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ
(池袋／としま／東京アーツプロジェクト事業)

公益社団法人企業メセナ協議会　2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業

フェスティバル/トーキョー14は東京クリエイティブウィークスと広報連携しています。

会期：2014年11月1日(土)－11月30日(日)

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor
Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.
Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.
Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation
Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts
Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.
Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima
Akihiko Senda, Theatre Critic
Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Kouichi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Hirotomo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Directors Committee
Representative: Sachio Ichimura
Deputy Representative: Hirotomo Kojima
Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori

Executive Committee Office
Administrative Manager: Madoka Ashihara
Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Luna Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi
Public Relations: Sae Horie, Yuko Yukawa
Sales & Planning: Rie Nagahara
Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Office Assistant: Saki Hirata
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki, Kyoko Yokokawa

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Yukiko Kato
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction & Design: Kosuke Kawamura
Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura)
Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki

Asia Series Programing: Seunghyo Lee
Schlingensief Film Series Programing: Ulrike Krautheim

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation,
NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO,
Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO,
TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima,
Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association,
Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street
Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
PR Support: Poster Hari's Company
Supported by Arts Council Tokyo
(Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014
(Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises)
Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan
(2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)
Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks

Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014

インターン：阿部侑加、入江郁美、岡崎由実子、加藤希美、加藤彩、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤瑞起、清水千奈美、杉本真理江、高橋雅臣、田中秀樹、田中沙織、田中直子、遠山尚江、中村みなみ、萩原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石直輝、福地沙綾、三竿文乃、山下誉紀子、山口将邦、吉原早紀

F/Tクルー：青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敬子、荒井純奈、新井朋行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚幸、大迎美希、大出萌、小川真理子、小山内梓希、小野寺ありす、垣田みずき、加園千夏、片山悠太朗、桂里穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七海、児嶋祐佳、小林恵理子、境田博美、佐川逢郎、崎濱恵梨、篠彩夏、篠原沙織、島根慈子、霜鳥桜子、鈴木茜、関島弥生、高橋志緒、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田貴生、照沼静香、渡並航、冨永愛香、中俣恵美、中川朋子、中村直樹、中村公子、中村光子、根本明美、波田野宇乃、蜂谷翔子、林ひかり、平野桃里、胡潤、藤田夕起子、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田結香、山口侑紀、四浦麻希、吉田美幸、四方田靖子、跡見学園女子大学 曽田ゼミ・イシカワゼミ

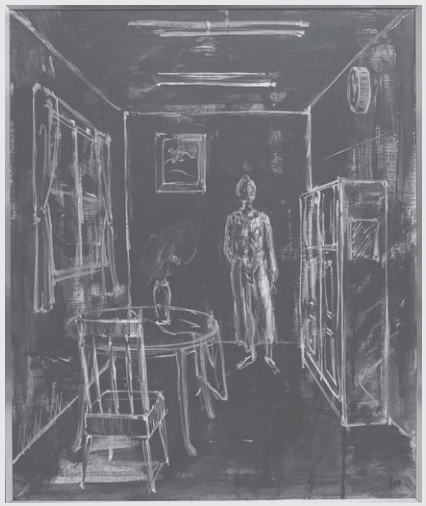
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会　〒170-0001　東京都豊島区西巣鴨4-9-1　にしすがも創造舎　TEL:03-5961-5202　http://festival-tokyo.jp/
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会　デザイン：小林 剛(UNA)
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。　禁無断転載

桜の園

ミクニヤナイハラプロジェクト
作・演出：矢内原美邦

The Cherry Orchard

Mikuni Yanaihara Project
Text, Direction: Mikuni Yanaihara [Japan]



11/13（Thu）– 11/17（Mon）
にしすがも創造舎
Nishi-Sugamo Arts Factory

FESTIVAL/TOKYO 14

演出ノート

矢内原美邦

演劇（と呼ばれるような）作品を作るようになって10年近く経つ。始めた当初はこんなの演劇じゃないとか、ただ喚いてるだけだとか、ある作品のアンケートでは「ゴキブリ演劇」とまで書かれながらも、ここまでやってきた。「ゴキブリ演劇」とは、これ名言！「ゴキブリ」でもけっこうだが、いちおう「演劇」と呼んでくれるのかとひそかに嬉しく思った。そもそもニブロールでダンスを作っていても、こんなのダンスじゃないと1000万回くらいは言われているので、いまさらなにを言われてもへっちゃらである。私にとってそれが演劇かダンスかという分類にはあまり意味がない。それでも言葉を主として扱う舞台芸術が演劇と呼ばれるのなら、私はそのフィールドで勝負したいと思っている。

出演する役者たちに言わせると、私の書く言葉は独特らしい。独特というと聞こえがいいが、要は発声しづらく、覚えづらい、ということらしい。それは普通の人が言葉を選ぶまでの経緯というか、言葉として結びつけられるまでのイメージの通り道が違っているからかもしれないとなんとなく思う。作品を観た人に、言葉が先にあるのか、体が先にあるのか、とよく聞かれる。どちらが先か、というよりも、たとえば詩人たちが意味の付随する言葉をはるか遠くへ押しやるように、私も意味が付随するまえの言葉をかすめとるように捕まえたいとは思っている。意味なんかに意味はない。と、ときに思う。

たとえばいま右の手に1という数字と、左の手に3という数字が想像できるなら、その間にあるはずの架空の2という数字を思い描く。そして「ワン、ツー、スリー!」と言ってみたくなる。それをノートにメモしたくなる。そんな衝動に突き動かされて言葉をとらえたいと私は思っている。右手と左手の間にある言葉が架空なら、そこには未来も過去も現在すらなくて、時間を失った言葉たちはどこへ向かうのだろうかと想像をめぐらすことができる。どこか遥か遠い場所をさまよって、やがては「ワン、ツー、スリー!」というひとつのかけ声になって、私の体を突き動かすのだろうかと。そんなふうに言葉にたいして向き合うときがある。そこにはまず体がある。右手と左手がある。「ワン、ツー、スリー!」と体が動いたとき、その次にどんな言葉が発せられるのか。考えるまでもなく言葉は落ちてくる。それを言葉の世界の人は感覚的だとか、意地の悪い人であれば単なる思い付きだと言うのかもしれない。それでも私にとってそれらは偶然な言葉ではない。言葉にたいして体が動くのか、それとも体にたいして言葉が発せられるのか、私にとってそれは重要な問題でもある。「そうだ！」と言って拳を突き上げるのか、突き上げられた拳に「そうだ！」という言葉を見つけるのか。そこの境界線を行ったり来たりしながら、言葉というものを探っている。

今回の作品『桜の園』は、一本の桜の木をめぐるいくつかの物語で構成されている。桜を伐るか、否か。そこにいる人たちにはそれぞれの主張があり、賛成があり、反対があり、ある人の意見は一見正しいことのようでもあり、もう一方は一見悪いことのようでもあり、果たしてそこには正解はない。ただ彼らにはそれぞれの正義がある。人間関係や、環境、生い立ち、そして社会的な立場などが、彼らにそれぞれの正義を与える。一本の桜の木をどう見るか。出演者にはできるだけ多くの視点で言葉を発するよう伝えた。役者の体が一本の桜の木を中心にいくつもアプローチを生み出し、台本はどんどん書き換えられていく。その言葉は机の上にはないと思う。ときに言葉は意味を失い、時間を失い、どこか遠くの方をさまよいはじめる。どこまでが体で、どこまでが言葉なのか。その境界線で揺れ動く言葉を、すり抜けながらかっさらいたい！そんなふうに思う。

私は100年後には確実に死んでいるわけですが、きっと言葉は残る。現状からの脱却が未来のない未来につながる。ような気がしている。言葉を書くということはきっとみっともない体をさらけだしながら生きることを見つけるようなものなのかな、と最近思っている。それを出演者たちと共有し、観客と共有できたら、それでこの作品はオッケーなのだ。

やないはら・みくに
1997年パフォーミング・アーツカンパニー、ニブロールを結成。数々の海外のフェスティバルに招聘され、先端的な劇場として知られるThe Kitchen（NY）での単独公演も行う。2005年、演劇作品に取り組むミクニヤナイハラプロジェクトを始動、2012年『前向き！タイモン』で第56回岸田國士戯曲賞を受賞した。off-Nibroll名義で美術作品も制作、アニメ『ホッタラケの島』の振付を担当するなど、領域を横断する活動を続けている。日本ダンスフォーラム大賞、横浜市文化芸術奨励賞受賞。近畿大学舞台芸術学科准教授。

矢内原美邦×出演者座談会

つかめない未来、なくしたくないもの

左から、光瀬指絵、川田希、川上友里、笠木泉、矢内原美邦、菊沢将憲、佐々木至、山本圭祐、鈴木将一朗

「故郷を失う」とは……？

――本作では庭園をめぐる人々の思惑や運命が、チェーホフ『桜の園』の変奏のようなかたちで展開します。まず、山本さん演じる曽我部は、庭園地主の子孫。しかし、ラネーフスカヤと違って、土地を売ろうとする立場なんですよね。

山本　曽我部は自分のことを、家族の中で虐げられ、弟が優位にいると思っている。それでも他の人から見たら明らかに裕福です。どこか人を見下しているようなところは、僕にもあるのかもしれないですが、お金持ちの苦労や葛藤といったものが、実感としてわからなくて。その辺りを、これから掴んでいきたいと考えているんですけれども。

矢内原　山本くんは『前向き！タイモン』では農民役がすごく合っていたんですよ。こういう、金持ちのひとかけらもない人が、金持ちをやったらどうなるんだろう？　という面白さで配役してみたというのもあります。でもまあ、すごい貧乏とすごい金持ちって、似ているかもしれないね。

山本　そうかもしれないですね。あの農民役と曽我部って、卑屈だったりずる賢かったりするところが、どこか共通します。

――一方、土地を売らずにそのまま残してほしいと願って活動しているのが、“緑を守る会”のメンバーであるユウキです。

笠木　デモや沖縄の基地問題についてのニュースでもなんでも、次第に忘れられていく中で、たった一人だけになっても闘い続ける人って、社会に誤解され孤独に見える時がありがちですよね。信じているものを守ろうとした時、果たして自分はその最後の一人になれるだろうかという葛藤が、ユウキという役にも私自身にもあります。社会問題に対してどこか当事者ではないような生き方をしがちな状況の中で、今回の役をもらい、舞台の中だけでも、最後まで闘う人間になろうと思っています。

矢内原　ユウキは既に故郷を失ってしまっていて、だからこそ、庭園を守りたい、もう誰にも失ってほしくない、と願っている人。そこが、チェーホフの『桜の園』と違います。『前向き！タイモン』のツアーで東北に行った時、故郷を失うとはどういうことなのか、今書いたり演じたりしておかないといけないと考えたんです。そして、この役として真っ先に浮かんだのが、福島出身の笠木さんでした。彼女の故郷であるいわき市も、もう元のいわきではないだろうし。

笠木　うちはギリギリのところで津波の被害はなかったんですが、自分の記憶にある海沿いでは流されてしまった地区や風景もあって。原発も近いので、東京では知り得ない現実が、実家では当たり前にあります。みんな元気にやっていますが、見えないものもひっくるめて失っていて、それを「故郷を失った」と言えるのだと思います。（都市開発推進会社のミタを演じる）鈴木くんも実家はいわきで、親戚がやっているお蕎麦屋さんが流されたんだよね。復活したお店に、食べに行ったよね。

鈴木　そうなんです。代々続いていた蕎麦屋で、津波でもろに流されて。もう辞めるかっていう話になっていたのですが、道の駅でやれることになって。今は繁盛しているみたいです。

――代々といえば、曽我部の土地を継いで来た祖先が、菊沢さん演じる幽霊となって現れますね。

菊沢　この幽霊は曽我部に対し、100年前の先祖だと言いつつ、父親だとも言っていて、支離滅裂。幽霊なんて、いると思い込んでいる人がいるから存在するのかもしれない。故郷にしても、自分がそれを故郷だと信じているからそこにある。もし記憶喪失になったら、俺の故郷である門司という町は、自分の中から消えるわけじゃないですか。

――川上さんが演じる占い師のミミも、この幽霊の存在を認識するようです。

矢内原　ミミは実は“偽物”なんです。というか、乗っ取られる状態を、自分で作っている。

川上　最初は先祖のことをすごく考えて演じていたのですが……。自分自身を洗脳しているっていうことですよね？

矢内原　西洋の宗教や神様と違って、日本では先祖が神様になったりして土着する。それは明治になって廃止されそうになったけれど、住んでいる人達の抵抗によって神社として残った。これは柳田國男によると画期的なことらしいです。先祖が助けてくれるという気持ちが、日本人には強い。そういう宗教観を利用する新興宗教も多くて、ミミもその一人です。

不確定な未来に向かって「生きてる？」

――登場人物それぞれの守りたいものへの思いが錯綜する本作。皆さんにとっては？

佐々木　僕が今、一番失いたくないのは、新潟にいる親や兄弟です。昨日も、菊沢さんと川上さんと一緒に稽古場から帰る途中、お友達が亡くなられたという話を聞いていたら、胸がきゅーっとなって、親に「生きてる？」って電話して。親父は寝ていたんですけど（笑）。新潟は何度も震災にも遭っていて、海沿いで地盤も緩いので、ちょっと強い地震があると色々なものが壊れて「あれ、何もない」みたいなことになる。帰るたびに何かが違うんですけど、大好きな故郷です。

矢内原　（川上に）鳥取は？

川上　鳥取は離れてから好きになりました。小さいころは兵庫に住んでいたので、「めっちゃ田舎じゃねえか」って思う一方、クラスでは「変な言葉」っていじめられていて、「鳥取、むかつく」と思っていました。でも、離れて見ると、自然があって良いところだなあと。

菊沢　俺は悲惨な幼少期を過ごしたから、故郷の北九州は好きじゃないし、帰りたいとは思わない。結婚しているので、守りたいものと聞かれたら自分の家族です。これから生まれるかもしれない子供とか。ただ、仏壇は今の家にあるんですよ。ひいじいちゃんはかろうじて覚えているけど、それより上はわからないから、せめて名前くらい聞いておくべきだなと思っています。

川田　私、この間、家系図を作ったんです。うちの親が先祖に興味がない人で、私もお墓の場所すら知らなかったのですが、この夏にたまたま仕事で両親が育った九州に行く用事があったので、ついでにと思い、父の実家で戸籍をかき集めて。面白かったですね。十何人兄弟がいたり、疫病が流行ったのか同じ年に何人も亡くなっていたり。それを見てからお墓参りに行ったので、お墓に刻まれた名前も、これあの人でしょ、あの人でしょって。新鮮でした。私は父の仕事の関係でフィリピンのマニラで生まれて埼玉で育ったんですが、マニラにも一回行かなきゃなって思っています。何か、呼ばれているような気もするし……。

矢内原　指絵ちゃんも呼ばれたもんね。
光瀬　はい。私、祖母が沖縄、祖父が台湾の人なんですが、祖父と祖母がすぐ離婚したので、私は台湾に行ったことも祖父に会ったこともないんです。ところが一昨年、アジア舞台芸術祭のプロジェクトとして、美邦さんの作品で、台湾の俳優二人と三人芝居を作ることになり、日本を発つ数日前に、父が亡くなったんです。そうしたら美邦さんが、父の話を芝居に関係させたいと言ってくれて。台湾でお墓を探したりしました。
矢内原　ドキュメンタリーとフィクションが混じった劇にしたんです。
――こうして少しお話をうかがっただけでも、皆さんそれぞれ多様なルーツなり思い出なりをお持ちだということがよくわかりました。
矢内原　家族や子供を守りたいという声がありましたけど、私自身は、輝かしい未来が待っているなんて、これっぽっちも思いません。日本が戦争する可能性はどんどん上がっているし、世界中が今、不確定な未来に向かって突き進んでいる。私達は、表現する上で、そのことに気づかなきゃいけないんです。だけど、私みたいな「家族なんか守りたくねえよ」と思っている根暗な人間がやると、葛藤は生まれない。だからこそ、明るい未来を考えている俳優たちに、そういう私の思いを突きつけながら、日々稽古しているんです。

激しく、緻密に！　俳優泣かせの稽古場より

稽古場での矢内原は“鬼”だ。最初に行うのは、柔軟体操とストレッチ。「これくらい、ちっともキツくない！」「遊んでんのか」と矢内原が檄を飛ばしながら、俳優達の身体をグイグイと押す。「毎日やるんだよ。そうすればもっと声も出るし動けるようになるんだから」。

続いて、本稽古開始。怒濤のような早口の台詞と激しい動き、場面のリフレインといった、矢内原作品特有の芝居が展開する。「（リフレインの）1回目は何もせず、2回目で手を挙げます」「4回目で歩いて来て、この台詞のあとでそっちを向いて」など、矢内原が事細かに指示して決めていく。言葉一つ、動き一つが、次の言葉や動きのきっかけとなるため、ごく小さな言い間違いや動きのずれも致命的だ。まさに一触即発。

俳優にしてみれば、動きながら、今は繰り返しの何回目なのか、どの向きや姿勢で言うのかを判断して演じるだけでもひと苦労のはず。しかし矢内原は、台詞の明瞭さやニュアンス、さらには、役としての感情表現をどう込めるか、といったことをも厳密に要求する。
「厳しくて志が高い現場。技術的にも肉体的にもついて行くので必死です」（光瀬）、「全部見抜かれるから、ごまかしが効きません。中途半端な気持ちで挑むと台詞に負ける。全部をぶつけないと言えないんです」（川上）、「身体と向き合うという、役者の原点を感じます」（川田）……と、俳優達が語るハードな現場。矢内原作品のエネルギーはこうして生まれていくのだ。

（取材・文＝高橋彩子／撮影＝長谷川敬介）

作・演出：矢内原美邦
出演：笠木 泉、鈴木将一朗、光瀬指絵、山本圭祐、川田 希、川上友里、菊沢将憲、佐々木 至
映像：佐藤信介
美術：曽我部昌史
美術アシスタント：丸山美紀、長谷川明
衣装：スズキタカユキ
ヘアメイク：河西幸司
ヘアメイク・アシスタント：堀川知佳、舟崎彩乃
舞台監督：鈴木康郎
演出部：大津英輔
照明：伊藤 馨

映像撮影クルー
監督：佐藤信介
撮影：与那覇政之
撮影助手：大竹正悟、戸羽正憲
特機：平川真司、沼田真隆
制作：丸岡るみ子

宣伝美術：石田直久
メインビジュアル・ヘアメイク：EBI
映像テクニカル：須藤崇規
音響コーディネート：相川 晶（有限会社サウンドウィーズ）、木下真紀
制作：奥野将徳（precog）、植松侑子・横堀応彦（フェスティバル/トーキョー）
制作アシスタント：藤井さゆり
インターン：阿部侑加、田中秀樹、三竿文乃
フロント運営：三五さやか
協力：オンビジュアル、オフィス ワン・ツー・スリー、エースエージェント、スターダストプロモーション、舞プロモーション、ニッポンの河川、劇団はえぎわ、急な坂スタジオ、Angle pictures、神奈川大学曽我部研究室、マチデザイン、長谷川明建築設計事務所、日本大学佐藤慎也研究室、湯山千景、ニブロール

記録写真：片岡陽太
記録映像：須藤崇規

製作：ミクニヤナイハラプロジェクト
共同製作・企画・主催：フェスティバル/トーキョー

Text, Direction: Mikuni Yanaihara
Cast: Izumi Kasagi, Syoichiro Suzuki, Yubie Mitsuse, Keisuke Yamamoto, Nozomi Kawata, Yuri Kawakami, Masanori Kikuzawa, Itaru Sasaki
Video: Shinsuke Sato
Stage Design: Masashi Sogabe
Stage Design Assistants: Miki Maruyama, Akira Hasegawa
Costumes: Takayuki Suzuki
Hair & Makeup: Koji Kasai
Hair & Makeup Assistants: Chika Horikawa, Ayano Funasaki
Stage Manager: Koro Suzuki
Stage Assistant: Eisuke Otsu
Lighting: Kei Ito

Video Crew
Director: Shinsuke Sato
Camera: Masayuki Yonaha
Camera Assistants: Shogo Otake, Masanori Toba
Grips: Shinji Hirakawa, Masataka Numata
Production Co-ordination: Rumiko Maruoka

Advertising Design: Naohisa Ishida
Main Visual Design, Hair & Makeup: EBI
Video Technician: Takaki Sudo
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.), Maki Kinoshita
Production Co-ordination: Masanori Okuno (precog), Yuko Uematsu, Masahiko Yokobori (Festival/Tokyo)
Assistant Production Co-ordination: Sayuri Fujii
Interns: Yuka Abe, Hideki Tanaka, Ayano Misao
Front of House: Sayaka Sango
In co-operation with On Visual, Office ONE, TWO, THREE, Ace Agent, STARDUST PROMOTION, INC., MY Promotion, Nippon no Kasen, Haegiwa, Steep Slope Studio, Angle pictures, Kanagawa University Sogabe Studio, matidesign, Akira Hasegawa Studio, Nihon University Shinya Satoh Studio, Chikage Yuyama, Nibroll

Photography: Yohta Kataoka
Video Documentation: Takaki Sudo

Produced by Mikuni Yanaihara Project
Co-produced, planned and presented by Festival/Tokyo